

## アーナンダの号泣



「やめよ、アーナンダよ。悲しむな。嘆くな。アーナンダよ。わたしは、あらかじめこのように説いたではないか、—すべての愛するもの・好むものから別れ、離れ、異なるに至るということを。およそ生じ、存在し、つくられ、破壊さるべきものであるのに、それが破滅しないように、ということが、どうしてありえようか。アーナンダよ、そのようなことわりは存在しない。アーナンダよ。長い間、お前は、慈愛ある、ためをはかる、安樂な、純一なる、無量の、身とことばとところとの行為によって、向上し来れる人（ニゴータマ）に仕えてくれた。アーナンダよ、お前は善いことをし、速やかに汚れのないものとなるだろう。」

「修行僧たちよ。過去の世に真人・正しくさとりを開いた人々がいた。それらの尊師たちにも侍り仕えることに専念している侍者たちがいて、譬えば、わたしにとつてのアーナンダのごとくであった。修行僧らよ。また未来の世にも、真人・正しくさとりを開いた人々があらわれるであろう。それらの尊師たちにも最上の侍者たちがいて、譬えばわたしにとつてのアーナンダのごとくであろう。」

修行僧たちよ。アーナンダは賢者であつて、『これは、修行完成者にお目に掛かるために修行僧たちが近づくべき時である』、『これは尼僧たちが（そうすべき）時である』、『これは在俗信者たちが（そうすべき）時である』、『これは在俗信者たちが（そうすべき）時である』、『これは、国王や大臣たち、異教の師たち、異教の弟子たちの（そうすべき）時である』、『これは、この四つを知らず』

「修行僧たちよ。アーナンダには、この四つの不思議な珍しい特徴がある。その四つというのは、どれどれであるか？」

修行僧たちよ。もしも修行僧の集いが、アーナンダに会うために近づいて行くと、かれらは、会っただけで心が喜ばしくなる。そこでももしもアーナンダが説法するならば、説法を聞いただけでもかれらは心が喜ばしくなる。またもしもアーナンダが沈黙しているならば、修行僧の集いは、かれを見ていて飽きることが無い。

修行僧たちよ。もしも尼僧の集いが、乃至……在俗信者の集いが、乃至……在俗信者の集いがアーナンダに会うために近づいて行くと、会っただけで心が喜ばしくなる。そこで、もしもアーナンダが説法するならば、説法を聞いただけでも心が喜ばしくなる。またもしもアーナンダが沈黙しているならば、修行僧の集いは、かれを見ていて飽きることが無い。」（中村元訳『ブッダ最後の旅』岩波文庫、一三七―一三九ページ）

「面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を楽しくす、面わずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘す」

佐々木閑 「仏教とは何か」 <https://youtu.be/VLI5mTuj0vC>

ブッダの最期⑨（佐々木閑「仏教哲学の世界観」第3シリーズ）

<https://youtu.be/QH9Vp8Jfb7o>

ブッダの最期⑩（佐々木閑「仏教哲学の世界観」第3シリーズ）

<https://youtu.be/sXZpqzvdAjQ>

佐々木閑『仏教の誕生』河出新書、東京：河出書房新社、2020

